

私たちが木々に囲まれた生活を始めたことを知った方々から、「今度遊びに行くよ」と声をかけていただくことが多くあった。ずいぶん遠方からKさんがわざわざそのためだけに訪ねてきてくれたのには恐縮した。どんな世捨て人のような暮らしをしているのか見にくられたのであれば期待はずれであったかもしれない。それでもいろいろな方から「羨ましい生活ですね。」と言っていただけたのは素直に嬉しかった。しかし、そんな時は長くは続かなかった。WHOがパンデミック宣言をして以降、お客様が来られることは途絶えてしまった。それでも我が家は千客万来。

まず最初に来られたのがキタキツネだ。時々、敷地内を歩き来しやすくするために草を刈ってススキや木屑を敷いてつくった園路をとことと散歩している。キタキツネは寄生虫を媒介しエキノコックス症を引き起こすので親しくはできない。向こうも親しくする気はなさそうで、こちらの顔を見てもすぐに逃げ出すでもなく何事もなかったように悠然と立ち去るのである。ただ、夜中に鳴かれるとちよつと怖い。コンコンと鳴くと思ったら大違い。ギャーアアワと大きな声で、まるで人間の大人が奇声をあげて叫んでいるようで事件性が高いのだ。

タヌキも数度いらした。一応、畑もあるのであまりお近づきになりたくないでお引き取りただこうと外に出たら、何を間違ったか縁側の下に潜り込んでしまった。姿は見えたので縁側に向かって一歩踏み出し圧をかけて見たが小さく丸まったままで動かない。少し可哀想だが冬だったので雪玉を投げつけて追い出すことにした。ところがそれでもピクリとも動かない。タヌキの「死んだふり」というのは本当で、それもかなり名優だ。諦めて家の中に戻って様子を見ていたが動き出した気配は無かった。このまま同居するのは勘弁して欲しかったが、しばらくして外に出て見ると姿が消えていた。さすがタヌキ。

隣人は庭をエゾシカが横切ったことがあると言っていたが、我が家の敷地には来られていない。・・・のはずだ。敷地のほとんどは夜は真っ暗闇になるのでどんなお客さんが来られているのか検討がつかない。数年前は家から百メートルも離れていないところでえヒグマの目撃情報があつてニュースになっていた。知らぬが仏である。それでも雪の積もった冬は足跡からどんなお客さんが来られていたのかある程度わかる。良くウサギの足跡は見るがお会いしたことはなく失礼している。

結構フレンドリーなのはエゾリスだ。最初の冬に明け方寝室の窓のあたりで物音がするので目を覚ましたら、縁側に積んだ薪の上にちよこんと座ってこちらを見ているエゾリスと目があつた。エゾリスは三角形の耳の上に長い毛があるのがなんとも可愛いのだが、仕草はどちらかというとおっさん臭い。股を開き加減にちよこちよこ動く姿はステテコがお似合いだ。ただ、全速力で敷地を横切る時は別人のように素早く、手足を胴と一直線になるように伸ばして地上すれすれを飛ぶように移動する。雪に残された足跡からも飛ぶ姿がわかる。

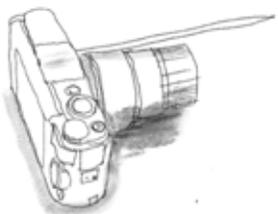


そんなお客さんたちのなかで、最も親しくしていただいているのが鳥たちだ。春分の日がすぎてどんどん日が長くなるとたいへんだ。明け方といっても日の出の一時前ぐらいから鳥たちが一斉に鳴き出す。日の出の前の時間には、市民薄明という時間と、航海薄明という時間があるそうだ。市民薄明は灯などなくても歩ける明るさで、航海薄明は闇夜に水平線が浮かび上がる程度の明るさということだ。鳥たちは市民薄明など待っていられずに航海薄明の頃から鳴き出すのがある。なので、竹山で夜更かしするのは控えるようにしている。鳥たちが一斉に鳴き出すのを鳥のコーラスとも言ったりするようだが、どちらかというとコンサート開演前のオーケストラのチューニングみたいで、それぞれのペースで鳴いている感じだ。良く聞くのはシジュウカラやヒヨドリであるが、オオルリやクロツグミが鳴くと思わず聞き惚れてしまう。

鳥は朝だけでなく、昼も夜もメンバーを変えてやってくるが、朝来るお客さんにはまいてしまうことがある。やはり寝室の窓際でコトコト音がするので見て見ると胸がオレンジ色のヤマガラが積んだ薪の上にチヨコンと止まっていて、しきりに小首をかしげてこちらを見ているのだ。「まだ、起きないんですか。もう明るくなってきましたよ。」そして「大丈夫ですか。息してますか。」と言っているかどうかはわからないが、どこか、心配そうな表情で小首をかしげてこちらの様子を伺っているのだ。これには本当にまいてしまう。

いったいどのくらいの種類の鳥たちが我が家を訪れてくるのか、サインまでのもらえないが記念撮影をすることにした。動物写真家の使うバズーカレンズは重そうだったし一眼レフで揃えると高いので、超望遠コンデジで済ますことにした。文字通りコンパクトなのに望遠力がすごく、月のクレーターもくっきり写る。さっそく来訪記念撮影にトライしたが、痛恨の選択ミスをしたのに気が付いた。このカメラにはファインダーが無かったのだ。大きめのディスプレイがついているのだが、それを頼りに飛んでいる鳥を画面に捉えるのは至難だし、仮に木に止まっても枝や葉の間にいる鳥を探し出すのは苦勞する。そこで、焼き鳥などに使う竹串をカメラの上部にレンズの向けている方向にテープで止めてみた。これがあると竹串をターゲットに向けることで瞬時に画面に収めることができるのだ。

そうやって記念撮影に応じたのは、トビ、オジロワシ、オオジシギ、アオサギ、カケス、マガモ、キジバト、シメ、ヒヨドリ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、アオジ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ハシブトガラ、アカハラ、ツグミ、ウソ、クロツグミ、メジロ、ミヤマホオジロ、ホオジロ、モズ、オオルリ、カワラヒワ、キセキレイ、アトリ、そしてシマエナガ。みなさん撮影にご協力いただきありがとうございました。中には撮影は遠慮したいという方もいる。良くいらっしやるのに声だけのウグイス。畑づくりには欠かせないカッコー、奇怪な声で驚かせるアオバト、夜更かしのフクロウの誰か。あと、上空を通り過ぎるだけのハクチョウのみなさんかな。





悩ましいのは、お客様のおもてなしだ。ここに暮らし始めた当初から鳥たちの来訪は楽しみな時間だったが、おもてなしはしないようにしようと妻と話していた。餌をあげることで人の手に依存してしまいはしないか。そうなる私たちが死んだ後、生きていくのが大変にならないかということを実剣に話していた。ところが最初の冬の正月二日に窓の外を見ると、木にリンゴがなっているのではない。同じ仲間とはいえずミの木にリンゴができるはずがない。妻の言葉だ。あれだけおもてなしはしないでおこうと言っていた本人が、ヒヨドリ可愛さに負けてしまったようだ。もともとは自然豊かな環境に暮らして苦労しながらも食べ物には恵まれていたのが、人が木を切り造成して住み始めたことで食べ物が減ってきた。その分をおかえししなければ。それに、近所は皆餌台を置いたり脂身を吊るしたりしているのに、うちだけ我慢しても意味がない。というのが理屈のようだ。一週間後には窓の前に小さな箱が置いてあってヒマワリのタネが入っていた。当然、ヒヨドリはやってくるし、シジュウカラやアカゲラ、ゴジュウカラなどの小鳥が次々とやってくる。早朝に窓際にやってきていた鳥も、最初は「もう起きませんか。大丈夫ですか。」と言っていたのが、小首をかしげて「ご飯はまだですか。」と言うようになってしまった。翌年には、あり合わせの木材で立派な餌台もできてしまった。作ったのは私だが。餌台は木の枝を使ったりできるだけ自然の状態に近づけてみた。例えば、アカゲラなどのキツツキの仲間が脂身が好きだが、少し太い木の枝に横から穴を空けてそこに脂身を詰めるようにしてみた。キツツキが木に穴を空けて中にいる虫を食べるのに近くしたのだ。とは言っても自己満足的免罪符にすぎないのだけれど。ただ、ひとつだけ絶対守るルールを妻と決めた。それは、雪が解けて土が出てきたら餌台は仕舞うということだ。

鳥さんたちが来てくれるのにはもう一つ悩みがあった。鳥の子供達が飛び始めるころになると、中には窓を知らずに激突してしまうのがある。バードストライクだ。窓のガラス面は角度によっては良く外の風景を反射して鏡のようになることがある。そこにあたかも広い空間が広がって森につながっているように見えてしまうのだ。幸い、我が家に激突した鳥たちは脳震盪を起こしてしばらくじっとしていることはあっても、そのうち飛び立っていつてくれた。ただ、隣人たちの話を聞くと、毎年のように亡くなる鳥がいるという。これは、明らかに後から家を建てて危険な状態をつくった私たちの責任なのだが、いろいろ調べても有効な対策が見つからなかった。良くタカなどの小鳥の天敵のシルエットをシールにして窓に貼るのを売っているが、効果は薄いみたいだ。

風車をたくさん作って窓の前に置いてみたり、蛍光色のテープをたらしてみたり、いろいろ試したが我が家の見かけが悪くなるばかりで効果はなかった。あるとき窓の西日対策に簾をつけてみたら、内側からの眺めもそう悪く無かった。そして鳥たちががぶつかっても簾がクッションになって大ごとにはならない。なので我が家は冬も簾がかけっぱなしの変な家になっている。

